

くまもと市PTA会報

熊本市PTA研究大会

平成25年度で第28回目となる熊本市PTA研究大会が、「生きる」〜今から生き抜くために〜を大会テーマとして、約800人の会員の参加のもと開催されました。

研究大会は全体講演と3つの分科会で構成され、各方面で御活躍の講師の方々から、「今から生き抜く」貴重なヒントをいただきました。

◆全体講演 「生きる」それは対話力

子どもと共に対話力を育むためには

フリーアナウンサー 池田美保氏

コミュニケーション能力の低下が指摘される中、フリーアナウンサーという仕事を通して、また様々な環境や学生と接する中で実感した「音声表現の大切さ」について、お話しいただきました。

「対話」とは「向かい合い、つなぐこと」。人が向かい合い、つなぐには「あいさつ」が必要であり、また、「あいさつ」は家庭の中で「社会を意識する最初のきっかけ」であると、池田氏はお話されました。

「なぜあいさつを言わなければならぬのか？」お子さんと話されたことがありますか？人と人

とのつながりは、「あいさつ」から始まります。「ごめんなさい」「ありがとう」という基本的な挨拶を、過保護な親が先に言うため、自分で言えない(言う必要がないと意識してしまう)子どもがいるそうです。コミュニケーションの方法は学校では習いません。自分の親の姿から学び、受け継いでいるといえます。

コミュニケーションは、「どれだけ相手のことを考えて話ができるか」というポイントさえ身につければ楽しくとることができるようになります。

まず、「相手と呼吸を合わせること」。「言葉にならない言葉」にも耳を傾け、相手がどんなことを話したいと思っているかに目を向ければ、会話はどんどんはずんでいきます。

話すときに大事なものが、「音声表現」です。



1. 大きさ
 2. 高さ
 3. 速さ
 4. 間の取り方
 5. 声色
- この5つで、声の表情が変わってきます。
- また、聴くほうにもポイントがあり、
1. うなずく
 2. 相槌
 3. 言い換える
 4. くりかえす
 5. 相手を否定しない
- で、体の向きも相手に向け「全身で聞いてくれてる」という、気持ちよく話せる環境を作ることが大事とのことでした。
- 「話す・聴く」これを親が身に付けることで、子どもたちにもその姿勢が伝わるそうです。
- 「私とあなたは違う」「互いが違う」ということを知ることで、互いに分かり合えることにつながります。
- 一人では生きていけない世の中です。会話をして相手がいる、自分と違う人がある、自分と違う価値観があるのだということ、そしてお互いに歩み寄るということを実感することが、人生の喜びになるのだと話されました。
- まず私たち親にできること

熊本市PTA協議会

会長 上田 芳裕
編集責任者 楠本 誠二

熊本市中央区草葉町5-1
TEL(356)1122 FAX(351)2309
http://www.kumamotocity-pta.net
info@kumamotocity-pta.net

印刷：(株)キャップ
TEL(362)3333

会長あいさつ

研究大会「よせせ」

熊本市PTA協議会 会長 上田 芳裕

本研究大会は、「生きる」〜今から生き抜くためには〜をテーマとさせていただきます。全体会と3つの分科会形式で行って参ります。

変化の激しい社会環境の中、今を生きる子どもたちが、将来社会人として巣立つとき、必ず必要となるのが「生きる力」であります。

情報化社会が進展する中、ついつい見過ごしてしまふ、我が子とのコミュニケーションのあり



よう、スマホとの付き合い方、深刻化する不登校やいじめ問題など、この研究大会を通じ、自らを、そして皆さんのご家庭を見つめ直す機会にして頂ければと思います。

この後の基調講演・分科会を楽しみにして頂きたいと存じます。

さて、多くの皆様にご参加いただいておりますので、本年の市P協議会としての取り組みや課題について、2点申し上げたいと思います。

まず、1点目としては、本年多くの皆さんに、ご苦労とご尽力を頂いた「夏休みプール開放の取り組み」であります。

「子どもたちの命を守る」「安全・安心の徹底」に向け、心

監視員の確保、子どもたちの入水人数の制限などに、各単Pで取り組んで頂きました。

市P協議会でも、アンケート調査に基づき、現在、次年度希望する学校全てがプール開放できるよう、また各単Pや保護者の皆さんの負担感が少しでも軽減できるよう、教育委員会と対応させて頂いております。

来年の1月〜2月には「次年度の取り組み」について、情報提供・意見交換ができるよう努力していきたいと考えます。その際は、本年開放できなかった単Pの皆さんへ、本年実施校での状況などを共有できればと考えておりますので、ご意見提起も含めご協力をお願い申し上げます。

2点目は、政令市PTA組織の特徴的な取り組みとして実施しています「チャレンジPTA/通称「C.P.P.プラン」についてであります。

既に2年目の取り組みとして、各単Pや区P連で申請・実践されていますが、「読書プラン・家族プラン・地域連携プラン・スキルアッププラン・教育文化プラン」の「5つのプラン」があります。このチャレンジPTAプランは、各単Pや区P連の取り組みの充実強化、さらには、新たな活動実践のきっかけにして頂くために、取り組んでおります。

今後、次年度の活動計画を作成される際には、市P協議会のC.P.P.プランのご活用も頂きたいと存じます。

それでは、最後になりますが、本研究大会で皆さんが感じ取られた事柄を、単位PTAの保護者・先生方・地域の皆さんにも広めていただく中で、学校と地域をつなぐPTAの役割・活動とはを考え、実践しあいたいということ、さらには、研究大会を企画・準備いただいた教養委員会をはじめとした皆さんに感謝申し上げます。

◆第1分科会

『不登校と子どもと未来』

講師 福岡県立八女工業高等学校教諭 平川三成氏

は、日常生活での「あたりまえのあいさつ」をちゃんと交わすこと。そして、毎日の生活の中で5分、3分でも、「今忙しいから」と後回しにせず、子どもと向かい合い、呼吸を合わせ「聴き・話す」時間を大切に、自分の気持ちを伝え合っていくことだと思えました。

西原中学校 甲斐あずさ
山本小学校 久富 将功
山東小学校 青木 勝照
若葉小学校 大平 浩司

現在、全国の不登校児童は小中学校で21175人、中学校で91079人。講師の平川氏は、複雑な家庭環境の中で育ち、不登校だった小中学校時代を経て、高校教師になるという夢を実現されました。

そんな平川氏の生の体験談を聞きたい、と沢山の方が参加された第1分科会は、「親は心中では、学校に行ってほしいと思っても、「行かなくてもいいよ」と言い、



まずは子どもの安心感を確保することが大切である」という言葉から、始まりました。

氏は、不登校時代、友だちの「ずるやすみ」「毎日が休みでいいね」という言葉がとてもつらかったといいます。そんな時、お母さんは「学校へ行け」と決断して言わず、待つてくれました。

不安いっぱいに進学した高校時代も、不登校だった劣等感か

らなかなか馴染めませんでした。しかし、担任の先生や個性的な仲間、また、所属した社会人バドミントンクラブでの出会いに励まされ、高校を無事卒業。

大学に入り将来を迷っていたとき、高校の恩師の「教師になりたい、と夢を語っていたじゃないか。三十人の生徒たちがお前を待っているぞ」という言葉で忘れていた夢を思い出し、一念発起で猛勉強、教師を目指したそうです。

「不登校というつらい体験があったからこそ、これからは生き抜くには人とのつながりが一番大切であると実感できる」と、語る氏のさわやかな姿に、感動の涙と未来への夢がこぼれ落ちた。分科会でした。

(帯山中学校 阿久根祐子)